

水俣・熊本見学会報告

病気と地域の冷たさに苦しむ公害被害者

今も続く潜在患者調査、被害者は10万人超の見方も

——水俣病公式確認60周年の水俣と震災の熊本を訪ねて

中川隆生

20年ぶりに訪れた水俣は、青い海に隔てられた天草の島々に囲まれた穏やかな不知火海、リアス式海岸の急斜面に広がるみかん畑を背にした漁村ののどかな風景が広がっていた。ここが何千、何万の住民の命、健康を奪った舞台だったとは昔も今も想像しにくい。

有機水銀を含む工場排水を垂れ流した加害企業チッソは水俣病問題解決特措法による事業再編で5年前、JNCに社名を変更した。今でも世界シェアの4割を占める液晶などを生産し、600人の社員と関連会社員を含め約1000人の雇用を担う水俣の城主的存在だ。水銀へドロが堆積した水俣湾は、東京ドーム12個分（58ヘクタール）の広大な海面が埋め立てられ、竹林と芝生が広がる市民の憩いの場になっていった。変わらないのは、チッソ城下町でひっそり暮らし続ける水俣病患者・家族の生きづらさだ。

11月10、11日の水俣・熊本地震被災地の見学会には15人が参加。初日は熊本県庁、熊本労働局で、熊本地震の被害、復旧状況、雇用対策などのレクチャーを受けた。見学会を準備してくれた会員の小野豊和さん（東海大教授）の自宅マンションに招かれ、小野さんは阿蘇、熊本市などの生々しい被害状況をパワーポイントで説明してくれた。このマンションもひび割れた壁が散見され、地震のすさまじさを実感させられた。



相思社で患者さんの話を聞く

2日目は、水俣病患者・家族の支援を続けている水俣病センター相思社の葛西伸夫さんの案内で、かつて水銀を含む工場排水を水俣湾に流した百間排水口、水俣湾のへドロ埋立地、チッソ水俣工場、患者が多発した茂道地区、水俣病歴史考証館を回った。

今年の水俣病公式確認60周年にあたる。筆者は第1次水俣病訴訟が続けられていた1970年4月に朝日新聞に入社し熊本支局に赴任。原告被害者の全面勝訴となった73年3月の判決の前後1年8ヶ月間は、現地水俣にも駐在した。その後は福岡、東京で経済部勤務、「水俣病」は一読者として接するだけだった。

たまたま、村山政権が1995年に水俣病最終解決案を決定した後に、現地ルポを書く機会があった。見学会はそれ以来の水俣訪問になった。

水俣病問題は何度も「終わった」とされてきた。しかし、終わるどころか今も潜在患者の調査・発掘が続けられており、被害の全貌すら確定していない。熊本、鹿児島両県が認定した患者は、2282

人（うち 1889 人死亡）にのぼる。未認定でも、国の救済策や裁判で約 7 万人の被害が認められているが、10 万人を超えているという見方もある。

60 歳代の女性患者の話を相思社の集会棟で聞いた。チッソ社員の父親が 1954 年に急性劇症型の水俣病を発病。2 年後に 38 歳で亡くなった。漁師の祖父も 9 年間の寝たきり後に死に、祖母も続いた。自らは症状があるものの、水俣病患者家族である事を他人に話すことを避けてきた。「ひたすら水俣病から逃げてきた」という。

チッソは、工場排水の有機水銀が水俣病の原因と疑われていた 1959 年に排水浄化装置（サーキュレーター）を作った。ところが、この装置は有機水銀を除去する能力はない。チッソはネコに排水を与える実験で工場廃水が水俣病の原因と認識できたはずなのに、見せ掛けの対策でごまかした。その後も、アセトアルデヒド製造設備の操業が停止されるまでの 9 年間、有機水銀は水俣湾に垂れ流された。皮肉にも「母親は生計のためサーキュレーターの突貫工事に従事した」。

女性患者は「もっと早く声を上げていれば貴重な海を失わなかった」と振り返る。今は「水俣病を語り継ぐ会」の会長を務め、水俣病の発信を続けている。それでも「加害企業と被害者が一緒にいることは本当に辛い」と付け加えた。



水俣病慰霊碑の前で

見学会の宿は水俣市の中心部の北にある湯の児温泉。新鮮な魚を堪能した。この温泉はチッソによって潤ってきた。水俣病問題が浮上する度に、「病名を変更したらどうか」「観光客が減る」などと声を挙げ、「水俣病問題」を圧殺する運動の先頭に立つてきた。そのリーダー格だった老舗旅館の経営者はすでに亡くなり、旅館は数年前に倒産していた。

公式確認から 60 年。熊本県の公害教育では、生徒の水俣訪問が義務化され、チッソは工場見学を積極的に受け入れるなど、「水俣病」を取り巻く環境は変わってきた。だが水俣病の症状に苦しみ、市民の冷やかな日を感じながら生き続ける患者・家族の日常は変わらないと思った。